

令和2年度 能古見小学校 校内研究

1 研究主題

自ら学びを切り拓く児童の育成

～ アクティブに学び合う学習過程の工夫を通して ～

2 主題設定の理由

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新，人工知能の発達により，社会構造や雇用環境は大きく変化しており，将来を予測することが困難な時代となっている。今後の社会を生きる子どもたちには，このように変化の激しい時代だからこそ，一人一人が持続可能な社会の担い手として，個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。

平成29年3月に告示された小学校学習指導要領解説算数編では，学校教育の役割を，

子ども達が様々な変化に積極的に向き合い，他者と協働して課題を解決していくことや，様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと，複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

としている。つまり，学校は，児童が新たな問題に出合ったときに，「どうすれば解決できるのか」と自分なりに考え実行したり，他者との協働により，解決策を導き出したりできるような児童の育成を目指していく必要がある。

また，中央教育審議会答申において，教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を，

ア「何を理解しているか，何ができるのか（生きて働く「知識・技能」の習得）
イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
ウ「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」

の三つの柱に整理されている。従来の「何を学ぶか」という学習内容に加え，「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」の視点が新学習指導要領では重要となり，そのためには，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められている。つまり，日々の授業を通して，子ども達が学ぶ喜びや大切さを感じながら，自ら考え表現していくことや，対話を通して考えを深めていくような協働する力を養っていく必要がある。

本校児童の実態としては，学習状況調査の算数科の結果を見ると，県正答率とほぼ変わ

らないが、「考え方」の観点では、正答率が5.1%上回った。昨年度までの研究で、問題解決的な学習をもとに、問題提示の工夫や、ペアやグループなどの対話活動の充実に取り組み、その成果が表れてきたと考えられる。一方で、考えを共有し比較・検討をする場面で、一部の児童の考えや教師の発言が中心になってしまい、児童の主体的な学びへとつながらなかったことなど、課題が見えてきた。これらの課題解決を図るため、教師の出番を吟味し、児童が中心となって活動する場や時間の確保が必要だと考えた。これらのことから、児童がアクティブに学び合うことができるような学習過程の工夫をしていきたいと考えた。

そこで、昨年度までの研究内容を活かしながら、算数科の学習過程において、問題解決に向けて見通しをもつことができる導入（ミッションタイム）の工夫や、児童が中心となり自由に学び合う展開（アタックタイム）の工夫、毎時間の授業を大切にすまともめ・振り返り・補充完結（コンプリートタイム）の工夫という点から授業改善を行えば、児童は、自ら学びを切り拓くことができると考えた。以上のようなことから、本研究主題を設定し、研究実践に取り組むことにした。

3 研究の目標

算数科を中心に、自ら学びを切り拓く児童の育成のために、児童がアクティブに学び合う学習過程のあり方を明らかにする。

4 研究の仮説

児童がアクティブに学び合う学習過程の工夫を、以下のような点から行えば、児童は、自ら学びを切り拓くことができるだろう。

- (1) 問題解決に向けて見通しをもつことができる導入（ミッションタイム）の工夫
- (2) 児童が中心となり自由に学び合う展開（アタックタイム）の工夫
- (3) 毎時間の授業を大切にすまともめ・振り返り・補充完結（コンプリートタイム）の工夫

5 研究の内容

- (1) 日々の授業実践

ア 問題解決に向けて見通しをもつことができる導入（ミッションタイム）の工夫

- ① 着目させたいこと、考えさせたいこと（数学的な見方・考え方）を明確にする。
- ② 児童が「問い」を生み出すような問題提示の工夫をする。

イ 児童が中心となり自由に学び合う展開（アタックタイム）の工夫

- ① 教師の出番を吟味し、児童が中心となって学び合う場や時間の確保をする。
- ② 児童の様子を見取り、思考の整理をする。

ウ 毎時間の授業を大切にすまともめ・振り返り・補充完結（コンプリートタイム）の工夫

①数学的な見方・考え方をキーワードとして整理した板書計画をし、児童の言葉でまとめ。

②学習を振り返り、理解を補い合う児童同士の交流の場や時間の確保をする。

エ 支援を要する児童への手立ての工夫

オ ICTの効果的な活用

(2) 日常の学習指導の工夫

ア ノート（図化）指導の工夫

イ 家庭学習の工夫

ウ 基礎的な力を定着させるための「学びタイム」の工夫

6 研究の方法

(1) 授業研究会や実践発表会

- ・全学級が研究授業を、こだま・やまびこ学級が、実践発表を行い、事前・事後の意見交流を行うことにより、有効な指導方法を探る。

- ・佐賀県教育センター作成の「授業改善セット」を活用し、授業改善に活かす。

- ・児童が、既習の知識・技能を活用できるための校内環境の整備をする。

(2) 講師招聘及び研究発表会への参加などによる理論研究

(3) 児童の実態把握

- ・学習状況調査やCRT，アンケート等の結果分析により児童の実態を把握する。

7 研修の計画

月	計 画	月	計 画
4月	研究推進委員会	9月	学年部会（指導案検討） 全体研究会（研究紀要について）
5月	全体研究会（研究の進め方など） 専門部会（計画）	10月	全体授業研
		11月	全体授業研
6月	全体研究会（研究授業計画） 全体研究会（指導案検討） 全体授業研（6年）	12月	児童の実態把握（県学力調査）
		1月	研究紀要原稿作成 研究推進委員会
7月	全体研究会（指導案について） 全体研究会（講師招聘理論研究） 専門部会（学習環境整備等）	2月	今年度の研究のまとめ
			児童の実態把握（CRT）
8月	研究推進委員会 学年部会（指導案検討）	3月	来年度に向けての話し合い